

オホーツク文化の牙製婦人像

高橋 健*

1. はじめに

オホーツク文化の牙製婦人像は、マッコウクジラなど大型の海獣の歯牙で作られた女性像であり、オホーツク文化を象徴する遺物の一つとされている。その容貌や衣装の表現、海獣牙という素材がエキゾチックな印象を与え、大陸からの強い影響を受けて成立したオホーツク文化のイメージとよく一致する。しかし、出土状況や共伴遺物などのコンテキストがわかる資料が乏しいこともあって、考古学的な検討は必ずしも十分に行われて来なかった。本論ではこれまでに知られている情報を整理した上で、若干の考察を試みたい。

本論の構成は以下の通りである。まず牙製婦人像の研究史を整理し、特に大陸における類例として注目されてきたサルモニー報告資料について検討する(第2章)。次にこれまでに報告された資料を集成し(第3章)、素材について考察した上で(第4章)、分類・編年案を提示する(第5章)。

2. 研究史

牙製婦人像が最初に報告された二十世紀初頭以降の研究史を、1950年代まで、1960～70年代、1980年代以降の3時期に区分して概観する。

2-1 1950年代まで

オホーツク文化の牙製婦人像の最初の報告例は、1901(明治34)年の『東京人類学会雑誌』に掲載された坪井正五郎の「北海道利尻島発見の海獣牙製の人形」と題する論文であり(坪井1901)、藤井秀の大野延太郎宛書簡を引用して、利尻島マタワッカ貝塚(亦稚貝塚)出土例がスケッチとともに紹介

された。

当時はまだ「オホーツク文化」が認識されるようになる前であり、坪井はこの資料を自身のコロポックル説(「石器時代」の住民が日本民族でもアイヌ民族でもなく、エスキモーに類似した民族だったとする説)を補強する材料として、エスキモーの海獣牙製人形と比較するために引用したのであった。「海獣牙製人形の発見は本邦石器時代人民とエスキモーとの類似を一層強くした」と結論づけている。

1930年代になると、北海道のオホーツク海沿岸と千島・樺太に分布する独自の土器・文化に対して、「オホーツク式土器」や「オホーツク文化」という名称が使われるようになった⁽¹⁾。1940(昭和15)年、米村喜男衛と北構保男によって、「オホーツク文化圏出土の牙製婦人像」が発表された(米村・北構1940)。亦稚貝塚出土資料に、根室市弁天島遺跡と網走市モヨロ貝塚付近の採集例を加えた3点の資料が紹介されている。資料の来歴から帰属時期に問題が残るとしながらも、同一目的で作られた類型品だと考え、さらにこれらが非常に硬いマッコウクジラの牙を素材とすることから、彫刻には金属器が不可欠である点を指摘した。乳房と肥大した腰部、衣服の着想状態などから、「婦人たる事を殊に強調する特長」を有しており、さらに両手を前に組み合わせた姿勢が「敬虔さを表現」して「宗教的意味」をもつと推測している。米村は1950(昭和25)年にモヨロ貝塚付近採集資料を改めて報告したが、背部の浮彫を「洋服に見る如き襷」として「西洋文化の影響」を考えている(米村1950)。

1950(昭和25)年、大川清は「北方文化圏出土

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

の婦人像」を發表し、浜中付近採集⁽²⁾の牙製婦人像を新たに報告した(大川1950)。大川は前年夏に利尻島の発掘調査に参加し、同年夏には利尻礼文両島を踏査していた(大川1998)。この資料は1950年夏の礼文島訪問時に実見したものだろう。素材については、セイウチ牙製だとする考えを示した。婦人像の性格については、米村・北構(同前)と同様に、「全体的には同一の目的をもつて製作されたもの」で、「北方的色彩を強く持った比較的年代の新しい文化」の所産だと考えている。さらに前かがみの姿勢から、人間の目の位置よりも高い所に置かれたと考え、神像であり礼拝像であると結論付けた。礼文島北部では、1949(昭和24)年夏に北海道大学による船泊砂丘遺跡の発掘調査が行われていたが、1952(昭和27)年の報告で、同じ牙製婦人像がマッコウクジラ牙製として報告された(児玉・大場1952)。

2-2 1960年代～70年代

学術的な発掘調査による牙製婦人像の発見は、戦後まもなくモヨロ貝塚調査団によって発掘された網走市モヨロ貝塚におけるものが最初であった。この牙製婦人像は1948(昭和23)年の第二次調査において出土したが、この調査の報告は1964年に『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻の別篇として刊行されたため、前述した大川論文では触れられていない。1966(昭和41)年には根室市オンネモト貝塚でも牙製婦人像が出土した。オンネモト貝塚の速報で、「出土例こそ必ずしも多くはないが、もっともオホーツク文化的な遺物の1つとしてなじまれた遺物」と述べられているのが(北構・岩崎1967)、牙製婦人像の位置づけをよく表している。

1968(昭和43)年には、大塚和義による「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」が発表された(大塚1968)。偶像(牙製婦人像)としては、従来報告されていた資料と上記の発掘例に加えて、礼文町神崎小学校⁽³⁾採集の2点、樺太(サハリン)本斗町南浜二丁目貝塚出土の1点を取り上げ、A～Cの3グ

ループに分類している。大塚はこれらをシャーマニズムと関連する遺物とみなしてオロッコやギリヤークなど北方民族の偶像と比較した。そして偶像を中心に山の神であるクマと海の神であるシャチの動物像を対置した「オホーツク文化における神概念」を提唱した。論文の最後では、「オホーツク文化ときわめて近似した文化遺物をもつ」アムール川流域のナイフェルド(ナイフェリト)遺跡の調査成果と、ロシアの研究者シェルが突厥文化との関連を想定した「北部モンゴリア」の偶像を紹介している。「オホーツク文化の担い手は、北部モンゴリア以西の地域と間接的にせよ接触があった」とし、オホーツク文化の起源について、「ナイフェルド周辺からアムール川の河口へでて、“海獣狩り”を体得し、なんらかの事情でいっきよに北海道の宗谷沿岸へ押し渡ってきた」という仮説を提示している。

1974(昭和49)年には、根室市オンネモト貝塚の報告書が刊行された。ここでは同遺跡から1966年に出土した資料が報告されるとともに、北構による付編「牙製婦人像について」において、類例10点⁽⁴⁾について等倍の実測図や写真が掲載され、考察が加えられた(北構1974)。大塚が紹介した「北部モンゴリア」資料については、サルモニー文献の抄訳を示して「南部モンゴリア」出土とした。マッコウクジラとセイウチの歯牙の断面写真を示して、素材についての検討も行っている。婦人像の系譜については、中国由来の杯をもつ婦人のモチーフが、シャーマニズム信仰をもつ突厥トルコ人に採用され、さらに黒竜江流域、樺太島の住民を経て、北海道オホーツク文化にもたらされたと推測した。シャーマニズムとの関連を想定する点や伝播の基本的なルートは大塚論文と共通するが、持ち込みと模倣、二次的な変容を考慮している点が異なっている。

1975(昭和50)年の『どるめん』誌の特集「北海の狩猟文化」のパネル・ディスカッション「海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」において、大塚は、牙製婦人像を動物像とともにシャーマンがエクスタ

シー状態に入るための道具だとみなした（大塚他1975）。また、その姿勢を「安息のポーズ」とみて、類例を「六世紀半ば～八世紀半ばに存在した突厥の石像群」に求めた。アムール河流域の住民こそがオホーツク文化の担い手であり、牙製婦人像も彼らの手で直接持ち込まれた可能性を考えている。

1977年に北海道大学において開催されたシンポジウム「オホーツク文化の諸問題」においても、何人かの発表者によって牙製婦人像に言及されている（大井編1982）。菊地俊彦は、オホーツク文化の精神文化を特徴づける遺物として牙製婦人像を取り上げ、「何のために彫られたのか」「なぜ女性像だけが作られたのか」と問題提起した（p.62）。大塚は、牙製婦人像をシャーマンと結びつける自説を展開している（p.131）。サルモニー報告資料に加えてシベリア（トゥーバ地方）の木偶との類似を指摘し、香深井 A 遺跡におけるクマ彫像とのポーズの共通性から人とクマの一体化がみられるという。さらに浜中2遺跡をキャンプサイトとみるかベースキャンプとみるかについての議論の中で、牙製婦人像の存在が注意された⁽⁵⁾（p.142）。これに対して大井晴男は、牙製婦人像の出土状態や機能が明らかではないことから、牙製婦人像の存在は必ずしもベースキャンプの証拠にならないと答えている（p.144）。

1978（昭和53）年、菊池はオホーツク文化の起源をめぐる論考の中で、牙製婦人像を取り上げた（菊池1978）。「満州ツングースおよび北東シベリアの諸民族」の衣装との関連を指摘する一方で、シベリアのシャーマンが女性に限られないことから、牙製婦人像はシャーマンではなく、「オホーツク文化の女性の通常の衣装と姿態」を表現したと考えた。

2-3 1980年代以降

1990年代以降に道北部で何度かにわたり行われてきた学術的な調査や、2000年代に入って道東部で行われた史跡整備に伴う調査などにより、各地でのオホーツク文化に関わる調査成果の蓄積は著しい

が、牙製婦人像の出土例はあまり増えていない。

前田潮・内山幸子（2001）は、1990年に浜中2遺跡の発掘調査で出土した資料を再報告し、下半身に四足獣を表現するという際立った特徴に注目した。「牙製婦人像と熊の彫刻の存在を、熊祭りを含む熊に関する狩猟儀礼中に見られる女性と熊との特殊な神話的關係によって説明」したL.S.ワシリエフスキーの所論⁽⁶⁾を紹介し、この四足獣がクマである「状況証拠」とし、子熊飼育との関連を考えた。マッコウクジラ歯牙の流通についても考察し、起源論については、大塚と北構の説を紹介したうえで、北構説により客観性が認められると述べている。

これと同年に北構（2001）は、弁天島遺跡で出土した資料を紹介した。牙製婦人像の起源について、「中国で発達した古代佛教文化の主要な一属性である佛像の遠い流れ」であり、「金銅像または木像などが歯鯨の大形歯牙を素材とする換骨奪胎のメタモルフォーゼ」したとする考えを示している。源流を中国に求める点は1974年論文と変わらないが、祖型が杯をもつ婦人から仏像に変化している。

高島孝宗（2003）は、オホーツク文化の信仰と儀礼を論じた中で、牙製婦人像も取り上げている。大塚と北構の見解を紹介し、牙製婦人像は「シャーマニズム的世界観を背景に大陸から伝えられたもの」としている。菊池（2004）は、牙製婦人像について、「ニヴフ民族の女性であろう」と述べており、シャーマンではなく普通の女性の像だとする意見は変わっていない。ただ、その関心は主に素材としてのセイウチ歯牙の流通に向けられている。高島（2005）は、オホーツク文化の威信財について論じる中で、牙製婦人像を非実用品かつ自製品だとして、クマ意匠遺物などとともに「共同体の祭祀に用いられる品であり個人の所有物ではない」と考えた。

2-4 サルモニー報告資料について

A・サルモニー（ザルモニー）や、Я・А・シェルによって紹介され、突厥の「石人」（石製の人物像）

との関連が想定されてきた「南部／北部モンゴリア」出土資料（本論の図2-6）は、長年にわたって北海道のオホーツク文化研究者の注目を集めてきた。すでにみたように、大塚や北構はこの資料を主な根拠として、突厥を起点とするオホーツク文化への伝播過程を推測していた。その後も、オホーツク文化の牙製婦人像の「原彫像」（前田・内山2001）の可能性が指摘されるなど、牙製婦人像の系譜上で重要な位置づけを与えられている。

この背景には、オホーツク文化の担い手についての議論がある。アムール河流域に居住した黒水靺鞨こそがオホーツク文化の担い手ではないかとする考えは、先にみた1975年の『ドルメン』誌の座談会でも加藤晋平によって述べられている（大塚他1975、pp.73-84）。靺鞨文化の遺跡から出土する帯金具などは、トルコ系の遊牧民である突厥の影響を受けた可能性が高いとされる。一方、ユーラシア大陸には「石人」と呼ばれる石製人物像が広く分布し、やはり突厥文化との関わりが想定されている。したがって、オホーツク文化の牙製婦人像とよく似た婦人像がモンゴル方面で出土し、それが突厥の石人と何らかの関わりがあったとすれば、オホーツク文化の系譜を探る上で極めて重要な手がかりとなると考えられたわけである。

この資料の出土地については、これまで北部モンゴリア（大塚1968）⁽⁷⁾、南部モンゴリア（北構1974）、モンゴル地方（宇田川1988）、モンゴル（前田・内山2001）などと紹介されてきた。しかし、以下の検討によってこの出土地推定には根拠が乏しいことを示す。

問題の資料は、1940年のサルモニーによる論文（Salmony 1940）に写真が掲載された（図2-6a）。所蔵はニューヨークのDirk Fochコレクションとされている⁽⁸⁾。その後、1966年にシェルの著作（III ep 1966）にサルモニー論文を引用元としてスケッチが掲載された（6b）。シェルは出土地を北モンゴリアとしているが、サルモニー論文においてインチ単位

で示されたサイズをそのままセンチ表記にするなどの誤りがある。したがってシェルがこの資料を実見していたとは考えにくく、図はサルモニー論文の写真をもとに描いたものだろう。

日本では、大塚和義（同前）がシェル論文に拠ってこの資料をいち早く紹介し、牙製婦人像との関連に注目した。1974年には北構保男によってサルモニー論文の抄訳が示された。北構は、後にサルモニー論文の全訳も発表している（サルモニー2001）。

シェルによって北モンゴリア出土とされたこの資料を、大塚がオホーツク文化の牙製婦人像と結びつけた点は卓見であったといえよう。しかし、その後の研究において、サルモニーやシェルによる出土地の記載を引きずり続けた点には問題があった。

サルモニー論文は、ユーラシアに広く分布する石人について論じたもので、当該資料は、中国からの影響を論じる際の根拠として提示されたものである。写真には、“Southern Mongolia, VII—early VIII century”というキャプションが付けられている。しかし、古美術商を通じて入手した個人コレクションの資料に確実な来歴情報があつたと考えにくい。資料の出土地が不明であったことは、サルモニー論文の以下の記述からも明らかである。

（前略）やがて発掘され、その秘密の発見地についての言及無しに、極東の高度に組織化された美術取引の網にかかったのである⁽⁹⁾。（p.14, l.17-20）⁽¹⁰⁾

それでは、写真のキャプションにある Southern Mongolia という記載はどんな根拠によるのだろうか。サルモニーは、この牙製人形を殷の玉製品や西周の青銅製品と比較した後、年代を決定する資料として、ラドロフによってモンゴル（Mongolia）で発掘された石製レリーフ（Salmony ibid: Fig.8）を取り上げている。このレリーフは、モンゴル国中央部のオンギン川沿いに位置する突厥の王墓で見つかったものである（Radlof 1892）。レリーフには、

中央の男性の両側に、尖った帽子をかぶり、片手にカップをもった女性二人が描かれている。この頭部のかぶり物の類似を手掛かりにして、サルモニーは、牙製人形が「突厥人によって7世紀か8世紀前半に葬送用の小像として作られた」と推測したのである。

トルコ系の製作者は、中国の国境近くに住んでいたために、漢代を通じてよく分かっていない用法や素材で残存していたシンボルを借用することができたと考えることができる。(p.14, l.9-11)¹¹⁾

葬送用の小像として、この歯製の *baba* [女性] は中国との国境近くか、ことによっては国境を越えた墓に入れられ(後略)(p.14, l.15-17)¹²⁾

以上の引用部分における記述から、サルモニーが製作者として(7~8世紀頃の)中国国境付近に住んでいたトルコ系民族を想定していたことは明らかである。石人像の起源に中国からの影響を考えるにあたって、China → Southern Mongolia → Mongolia という関係を考えたのが、サルモニー論文の骨子であり、中国とモンゴルとをつなぐ「ミッシングリンク」の役割を背負わされたのが、問題の牙製像であった。逆に言えば、そのような系統関係の存在を前提として、Southern Mongolia という製作地が導き出されたのである。

注意しておきたいのは、Southern Mongolia すなわち南モンゴリア¹³⁾ という語句の指す対象である。英語の Mongolia には、現代のモンゴル国を指す場合とモンゴル高原全体(モンゴル国と中国内蒙古自治区)を指す場合とがある。後者の用法の場合、Southern Mongolia はその南部、現在の行政区分という中国内蒙古自治区を指すことになる。上でみたように、サルモニー論文の Southern Mongolia は、中国国境の付近ないし内側のトルコ系住民の居住地域を指しているから、現在の中国内蒙古自治区に相当する地域を指すと解するのが妥当であろう。

以上の検討から、サルモニーは Dirk Foch コレクション中の牙製人形が南モンゴリア(現在の中国内蒙古自治区に相当)出土だと考えていたこと、その考えが「中国とモンゴルをつなぐ地域」という推測に基づくもので、確実な根拠をもたないことを示した。この論文が発表された1940年は米村・北構論文が発表された同じ年であるから、日本国内の研究者にも牙製婦人像はあまり知られていなかった。東洋美術の研究者であるサルモニーがオホーツク文化の牙製婦人像を知らなかったのは当然である。また、海外文献の入手が困難な時代においては、サルモニーとシェルの論文の内容を十分に比較検討することは難しかったと思われる。しかし、今日の視点でこの出土地不明の資料を改めて評価するとすれば、その発見地については、類似した資料(牙製婦人像)が発見されている北海道周辺だと推測するのが妥当であろう。つまり、サルモニー報告資料はオホーツク文化の牙製婦人像そのものである可能性が高く、北海道ないしその周辺で採集された資料が古美術市場に流出したものと推測される。

サルモニー報告資料がモンゴリア出土であると考える根拠がないとすれば、この資料をオホーツク文化の牙製婦人像の「原彫像」と推測する根拠は失われ、牙製婦人像の起源について突厥の石人を想定する積極的な根拠もなくなったといえる。ユーラシア大陸に広く分布する石人を検討した林俊雄によれば、石人は石製で「高さ40~50cmのものから2mを越すものまで」あり、基本的に埋葬施設に伴う(林2005)。これに対してオホーツク文化の婦人像は、牙製で高さ15cm未満、副葬例はない。素材、大きさ、出土のコンテキストが全く異なっており、両者をあえて関連づける必然性は薄い。

2-5 小活

牙製婦人像に関わる研究史を概観した。

1950年代までは、牙製婦人像が認識されるようになった時期である。この時期に扱われた資料はい

ずれも出土のコンテクストが明らかではなく、すでに逸失していたものもあったが、オホーツク文化に伴う遺物という認識は形成されていた。

1960～70年代は牙製婦人像の研究がもっとも活発だった時期である。モヨロ貝塚やオンネモト遺跡における発掘調査での出土例が報告された。オホーツク文化の担い手について、黒水鞆靴やギリヤーク(ニブフ)を想定する意見が出されていた当時の研究状況を背景として、牙製婦人像の起源についても、大陸文化との関連が想定された。牙製婦人像の性格については、シャーマニズムとの関連を想定する見解が有力であったが、異論もあった。

1980年代以降の牙製婦人像研究は、新資料に乏しかったためもあり、やや停滞した状況にあったといえる。浜中2遺跡の特異な出土例によって牙製婦人像とクマ儀礼との関連が改めて注目された。素材の流通という視点からの議論が行われたが、既報告資料の見直しにまでは及んでいない。

これまでの牙製婦人像の起源論においては、海外の研究者が紹介した「北／南モンゴリア」出土とされる資料が重要な役割を果たしていた。しかし初出であるサルモニー論文を再検討し、この資料をモンゴリア(現在のモンゴル国ないし中国内蒙古自治区)出土とみなす根拠がないことを示した。

3 資料

3-1 資料について

これまでに知られている牙製婦人像の類例を概観する。道北部と道東部の遺跡から出土している(図1・表1)。前章での検討にしたがい、サルモニー報告資料は「出土地不明」として扱う。素材は重要な属性であるが、第4章で論じるため、ここでは扱わない。以下の記載にあたって、今回実物を直接観察できたのはモヨロ貝塚出土資料のみであり、他は報告者の記載と実測図・写真に基づいている。

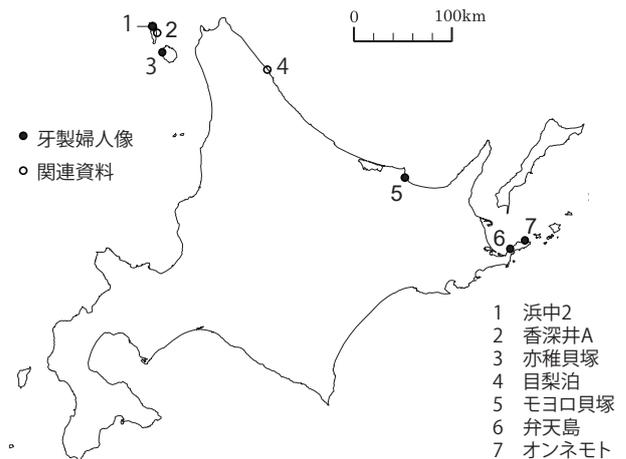


図1 牙製婦人像・関連資料出土遺跡

3-2 道北部の資料(図2)

道北部では、日本海北部の利尻礼文両島から5点の資料が出土している。採集資料が多く、出土状況が明らかなのは、浜中2遺跡出土資料のみである。利尻島の1点以外は礼文島北岸の船泊湾沿岸、特に中央部の浜中付近に集中している。オホーツク文化の拠点的な集落があったと考えられている東岸の香深井遺跡周近では出土していない。

利尻島：亦稚貝塚出土資料(図2-1)

亦稚(マタワッカ)貝塚は、利尻島西岸の杓形の集落中心部に位置する。この資料は発見後まもなく紛失したが、三方向からの略図が示されている(坪井1901)。添え書きによれば、「高サ曲尺二寸八分 重さ十六匁 面側の黒点は浅き凹窩なり 色は古き骨又は歯牙の如くにて淡褐色 滑澤あり 時維明治三十三年七月三十日午後三時 杓形マタワッカに於て藤井秀指揮の下に人夫某之を掘出し過て右肘を傷く」とある。この記述によれば、発掘時に欠損した右肘以外はほぼ完形だったらしい。高さ8.5cm、重さ60gということになる。頭は帽子または頭巾をかぶったような形態で、側縁には列点が施される。乳房はやや膨らみ、両手は腰の前で重ねられている。下半身が広がって安定した坐像であり、足の表現はみられない。

表1 牙製婦人像と関連資料の出土遺跡

図番号	自治体	遺跡名	発見年	初出	大塚 1968	北構	前田他 2001	
図 2-1	利尻町	亦稚貝塚	1900	坪井 1901	図 1-4	A	1974 図版 1	第 2 図 -4
図 2-2	礼文町	浜中付近	不明	大川 1950	図 1-3	A	1974 図版 2	第 2 図 -1
図 2-3	礼文町	神崎小学校	1952	大塚 1968	図 1-1	A	1974 図版 3	第 2 図 -2
図 2-4	礼文町	神崎小学校	1952	大塚 1968	図 1-2	B	1974 図版 4	第 2 図 -3
図 2-5	礼文町	浜中 2	1990	礼文町教委 1992	—	—	2001 図版 11	第 1 図
図 2-6	不明	不明	不明	Salmony 1940	図 9	—	1974 図版 10	第 2 図 -5
図 3-7	網走市	モヨロ貝塚付近	1939	米村・北構 1940	図 1-5	B	1974 図版 5	第 2 図 -6
図 3-8	網走市	モヨロ貝塚	1948	駒井・佐藤 1964	図 1-6	B	1974 図版 6	第 2 図 -7
図 3-9	根室市	弁天島	不明	米村・北構 1940	図 3	—	1974 図版 8	第 2 図 -8
図 3-10	根室市	弁天島	1994	北構 2001	—	—	2001 図版 12	—
図 3-11	根室市	オンネモト	1966	北構・岩崎 1967	図 4 左	—	1974 図版 9	第 2 図 -9
(図 4-1)	サハリン	本斗町南浜二丁目貝塚	1933	木村 1934	図 1-8	C	—	第 2 図 -11
(図 4-2)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1976	—	—	—	—
(図 4-3)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1976	—	—	—	—
(図 4-4)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1981	—	—	—	—
(図 4-5)	礼文町	香深井 A	1968 ~ 72	大場・大井編 1981	—	—	—	—
(図 4-7)	枝幸町	目梨泊	1990 ~ 92	枝幸町教委 1994	—	—	2003 第 1 図	—
(図 4-8)	網走市	モヨロ貝塚	2003	網走市教委 2009	—	—	—	—
(図 4-9)	網走市	モヨロ貝塚	1948	駒井・佐藤 1964	図 1-7	—	1974 図版 7	第 2 図 -10
(図 4-10)	根室市	弁天島	1994	北構 2003	—	—	2003 第 2 図	—

亦稚貝塚ではその後も何度か小規模な調査が行われ、1977年にはバスターミナル工事に伴う発掘調査が行われた(利尻町教委1978)。出土した土器は、鈴谷式土器からオホーツク文化の貼付文期にまで及んでいる。したがって、牙製婦人像の帰属時期について絞り込むことは困難である。

礼文島：浜中付近採集資料(図 2-2)

高さ13.8cmとこれまでに見つかった中で最大の資料である。頭頂部と顔面を欠損する以外はほぼ完全に残っており、首をやや右にかしげたポーズをとる。出土地点については、オションナイ(大川1950)、船泊砂丘第一遺跡(現在の浜中2遺跡付近を指す)から「西へ一丁余りの砂丘」(児玉・大場1952)などとされていたが、大塚(1968)が採集者への聞き取りによって重兵衛沢の砂丘と訂正した。これに従って重兵衛沢出土として引用されることが多いが、重兵衛沢左岸の重兵衛沢遺跡・重兵衛沢貝塚にはオホーツク文化の遺物がみられない⁽⁴⁾とする指摘もある(大井1976: p.8)。また大塚自身も、1977年のシンポジウム『オホーツク文化の諸問題』の席上で、「以前、私は重兵衛沢出土と報告しましたが、浜中から出たことがほぼ確実にになりました」

(大井編1982, p.131)と述べている。このように出土地の記載が二転三転した資料だが、これらの地点は全て船泊湾に面しており、いずれにせよ礼文島北部発見であることは間違いのないだろう。本稿では、浜中付近採集資料と呼んでおきたい。

顔面は菱形、厳密には上端が尖る扇形であり、中央に縦に欠損が入るが、吊り上った両目が残っている。大塚(同前)によれば、鼻の穴と口の痕跡も残っているという。欠損のせいもあるだろうが、異様な印象を与える容貌である。頭部の背面側中央には幅広の隆帯が垂れ下がる。隆帯の両側にはくの字・逆くの字の沈線が4本ずつ刻まれ、入れ子状のモチーフが描かれている。右腕はやや曲げて下半身に右手を置き、左腕は直角に曲げて左手を右肘に添えている。両手とも、きちんと5本の指が表現されている。胴体の前面には乳房があるが、膨らみはわずかである。後面には多数の細沈線からなるX字状の表現がみられ、何らかの衣装の一部を表したと考えられている。下半身は直線的に広がって裾付近では直立しており、側面観は等脚台形が長方形に乗ったような形である。下半身の後面に縦に14本の平行線が刻まれて、ひだ状の表現がされている。屈曲部のや

道北地域



1 亦稚貝塚、2 浜中付近、3・4 神崎小学校、5 浜中 2、6 出土地不明

図2 牙製婦人像の類例（道北および出土地不明）

や上から質感が異なっており、おそらく歯牙のセメント質であろう。断面図は示されていないが、歯髓腔が下端から最下部に横走る沈線の高さまで及んでいるという。

礼文島：神崎小学校採集資料1（図2-3）

神崎小学校は、礼文町北部の船泊湾のほぼ中央に位置する浜中の集落にある。牙製婦人像2点は、戦後の工事に伴って校庭北側から出土した（大塚同前）。神崎小学校のグラウンドは、1952（昭和27）年8月13日に竣工したから（礼文町立神崎小学校 n.d.）、おそらくその整備工事で出土したものであろう。こうした出土状況から、これらの資料の帰属時期は不明とせざるを得ない。なお大塚（同前）はこれらの資料の採集地点を「浜中遺跡」としているが、現在の登録上は「神崎遺跡」となっている¹⁵。本論では、これら2点の牙製婦人像を「神崎小学校採集資料」として、1・2の番号をつけて呼んでおく。

神崎小学校採集資料1は頭部から基部まで残っており、長さは9.2cmである。頭部・胸・下半身の前面が剥離しているが、乳房の突起があったことは分かる。また、肩の部分の割れ口から、腕は体の前に置かれていたと推測されている。首の付け根にわずかな浮き彫りがあり、鎖骨ないし衣服の表現とされている。頭部の前面は完全に欠損しているが、頭部を背面からみると菱形を呈し、7重の菱形の沈線が刻まれている。背中には、両肩を結ぶ横線と弧状の縦線2本から成るπ字状の浮線が施され、さらにその中央部には斜格子状の細沈線が刻まれている。これは、下半身の表現とともに、衣類を表したものであろう。ウエストは強くくびれており、下半身はパニエ状¹⁶に膨らんでいる。後面にはひだ状の表現がみられるが、ただ縦線を刻むのではなく、断面が半円状になるように立体的に彫り込んでいる。底面は平らで歯髓腔はみられないという。

礼文島：神崎小学校採集資料2（図2-4）

神崎小学校採集資料2は頭部と両腕を欠損しており、残存長7.6cmである。大塚（同前）によれば、

欠損は発見時のものらしい。上半身は板状で、乳房はわずかに膨らむ。腰の前面に両手が残存しており、両手を重ねずにそれぞれ腰（脇腹）に当てていたことがわかる。両手とも5本の指が表現されている。下半身はやや膨らむが、腰の屈曲部はゆるやかで、全体に細長いプロポーションである。背面に彫刻は施されていない。底面は円形で平坦に整えられ、歯髓腔は腰の付近まで及んでいるという。

礼文島：浜中2遺跡出土資料（図2-5）

浜中2遺跡は船泊湾のほぼ中央部の砂丘上に位置し、幾度にもわたって発掘調査されている。厚い魚骨層が残され、竪穴住居址や墓も見つかっているオホーツク文化の代表的な遺跡の一つである。

牙製婦人像は1990年の発掘調査で出土し、上半身部分が報告されたが、その後の整理作業の中で同一個体の下半身部分が新たに検出されたものである（礼文町教委1992、前田・内山2001）。上半身と下半身は厳密には接合していないが、高さ6.2cmに復元されている。上半身の残存部分は頭から右の上腕部にかけて、下半身の残存部分は腰から下の中央から左にかけてである。頭部は被熱により黒色化しており、右腕の割れ口は磨かれているという。

頭部は尖り、顔面は扁平だが、目・鼻・口が表現されている。頭部背面側には弧状の刻線が平行して左右に5本ずつ刻まれる。胸はわずかに膨らんでいる。表面は平滑で、衣類の表現とみられる彫刻はない。この資料の際立った特徴は、下半身の左前部に表現された四足獣である。顔面を欠損しており、割れ口は摩耗している。前田はこの彫刻が子熊を表した可能性を指摘している。オホーツク文化におけるクマ飼育の有無やクマ儀礼の問題とも関連して、極めて重要な資料である。

素材については次章で詳しく検討するが、内山（同前）によってマッコウクジラの下顎歯だと推測されている。腕や動物意匠、裾の外側にセメント質がみられ、それ以外は象牙質だという。

出土層位と所属時期については、前田（同前）が

詳細な検討を行っている。上半身・下半身ともにA-6区の出土で、上半身は14層（暗褐色砂層）上面から出土し、下半身は同区の10層（獣骨を含む魚骨層）のサンプル中に含まれていた。10層は14層の直上を覆うことから、両者は同一層位からの出土とみてよい。10層・14層はともに「沈線文期の層」とされている。報告書にはこれらの層から出土した土器が掲載されていないため十分に検討することができないが、発掘者の認定に従って、沈線文期に帰属するものと考えておく。

礼文島：元地遺跡出土資料

元地遺跡は、礼文島の南西岸に位置する遺跡であり、1970・71年に北海道大学北方文化研究施設によって発掘調査が行われている。オホーツク土器と擦文土器の接触様式である元地式土器のタイプサイトとして知られるが、オホーツク文化期の竪穴住居と貝塚が検出されている（大井1972）。

1977年のシンポジウム『オホーツク文化の諸問題』において、大井晴男が「こわれていますけどおそらく牙製婦人像だと思われるものを、貝層中で発見しております」と述べている（大井編1982: p.144）。しかし、元地遺跡の発掘調査は未報告であり、この資料についてはこれ以上の情報がないため、本論では考察の対象としない。

3-3 道東地域の資料（図3）

道東地域からは、4点の資料が出土している。2点が網走市モヨロ貝塚、2点が根室市弁天島遺跡と、いずれも拠点的な集落で見つかっている。

網走市：モヨロ貝塚付近採集資料（図3-7）

モヨロ貝塚は網走川左岸に位置するオホーツク文化を代表する集落遺跡である。本資料は、1939（昭和14）年にモヨロ貝塚付近で住民が拾ったものである（米村・北構1940）。頭部と右手を欠損しており、残存長6cmである。乳房ははっきり隆起する。左手は腹の前に置かれ、指は5本ある。首の付け根にはV字形、背面にはへにHの字を組み合わせた

ような浮彫が施され、衣類の表現であろう。下半身はパニエ状に膨らむ。下面は平らで、歯髄腔がみられるという。下半身の右側、右腕の欠損部分の下方には彫刻がある。「何か手に所持してゐた」と考えられ（米村・北構同前）、容器（大塚1968）や動物意匠（前田・内山2001）が想定されている。

網走市：モヨロ貝塚出土資料（図3-8）

昭和23（1948）年のモヨロ貝塚調査団による第2次調査において出土したもので、頭部と両腕を欠損する人物像である（駒井・佐藤1964、高橋2021）。高さ5.4cm、幅4.1cm、厚さ3.2cm、重さ30.5gを測る。表面は平滑であり、衣類の表現はみられない。乳房は小突起で表現されており、右側のみ残存している。下半身との境は明瞭に屈曲するが、その直上の腰部にはやや突出した欠損部分があり、両手が添えられていた可能性が高い。左半身の前面部は大きく欠損しており、左の乳房も残存していない。この割れ口は摩耗している。下半身はパニエ状にふくらみ、前面側がやや平坦な面となっている。下端はまっすぐに切断され、平らな面に安定して置ける。中央には髄腔が深く入り込んでおり、腰より上まで達している。底面方向から見ると、象牙質とセメント質の境が明瞭であり、象牙質には同心円状の構造がみえる。

上端の割れ口が風化していることと頭部が見つからなかったことから、廃棄時にはすでに破損していたと考えられる。素材の強度からみて相当に強い衝撃が加わったと考えられ、意図的な頭部の折り取りがあった可能性が高い。

この資料は10号竪穴出土の西壁外貝層の上から出土した¹⁷⁾（駒井1964）。この貝層からは、刻文期の土器口縁部破片多数が出土したが、出土した完形土器は沈線文期前半に相当する。貝層上からの発見であることを考えると、牙製婦人像は沈線文期に位置づけられる可能性が高い。

根室市：弁天島遺跡付近採集資料（図3-9）

弁天島は根室湾の北西に浮かぶ東西400m、南北150mの島で、オホーツク文化の竪穴住居址や貝塚

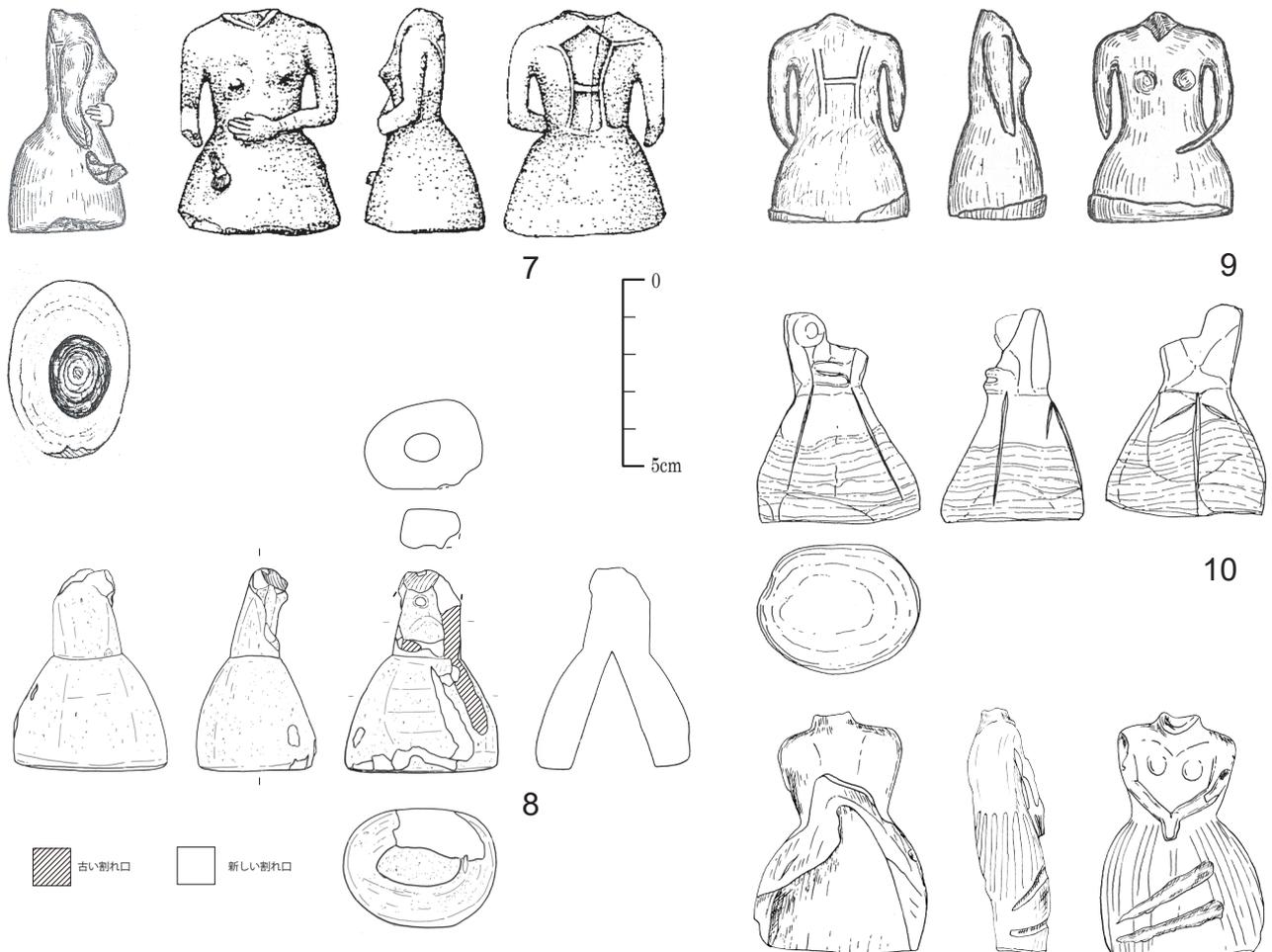
が残されている。明治初期のJ. ミルンによる調査以来、繰り返し発掘調査されてきた。

この牙製婦人像は、弁天島の灯台職員が波打ち際で拾得したが、1940年に報告された段階ですでに逸失していた(米村・北構同前)。首と右手を欠損し、残存長は約5.6cmとされる。正確な実測図ではなくスケッチである点に注意が必要だが、乳房ははっきりと隆起していたらしい。背中には、H字の浮彫が施されている。下半身はパニエ状に膨らむ。裾の近くには素材の質感の違いが表現されており、象牙質とセメント質の境だった可能性がある。

根室市：弁天島遺跡出土資料 (図 3-10)

1994年に行われた弁天島遺跡の発掘調査で、7号堅穴の床面から出土した(北構2001)。頭部と左胸を欠損し、残存長は約5.5cm。右の乳房は明瞭に隆起する。腰の前に二列の突起がみられるが、これは左右の手ないし腕を表現したものであろう。背面には彫刻等はみられない。腰ははっきりとくびれ、下半身はやや直線的に広がる。正面の左右に2本の刻線が縦に刻まれており、背面側では、縦線の両側に斜線を組み合わせて上向きの矢印状になっている。裾にかけて幅広く質感の違いの部分があり、セメント質だと考えられる。

7号堅穴の時期はオホーツク文化の「最盛期より



7 モヨロ貝塚付近、8 モヨロ貝塚、9・10 弁天島、11 オンネモト

図3 道東出土の牙製婦人像

終末期」で、3時期にわたる改築があり、牙製婦人像はそのうち最新段階の粘土貼床の端部から出土したとされている。つまりこの牙製婦人像は、オホーツク文化の終末期に帰属する¹⁸⁾。

根室市：オンネモト貝塚出土資料（図 3-11）

根室半島の北岸、オホーツク海に面したオンネモト湾に位置する遺跡である。1966・67年に東京教育大学による調査が行われた（東京教育大学文学部 1974）。

牙製婦人像は2号竪穴の北東に位置する貝塚から出土した。頭部を欠き、背面側を胴部から下半身にかけて大きく欠損する。残存長6.5cm。プロポーションは、左に傾いている。乳房は隆起するが、顕著ではない。両手は、指先を下にして体の前で掌を合わせている。右腕から両手にかけて、前面が欠損しているらしい。下半身の前面には大きなガジリ痕が二列入っている。下半身はパニエ状に膨らみ、側面にはひだ状の彫刻が浅く幅広の凹線で表現されている。後面にも続いていたと思われるが、欠損しているため不明である。欠損部からは、歯髄腔が腰の部分まで及んでいることがわかる。

出土層位は表土直下の獣骨層上面である。この貝塚は2号竪穴の構築後に形成されたと考えられている。2号竪穴は上下二枚の床面をもち、それぞれ藤本 e 群と d 群に対比されている。貝塚出土土器も、貼付文期の前半から後半にかけての資料を含んでいる。貝塚上面という出土位置を考慮して、貼付文期後半に位置づけておきたい。

3-4 出土地不明の資料（図 2-6）

サルモニー報告資料は、高さ $3\frac{5}{8}$ インチ(約9.2cm)で、全体に右前方に傾いたプロポーションである(Salmony 1940)。頭は尖り、帽子ないし頭巾をかぶっているような形である。目は沈線で描かれ、鼻は隆起している。乳房はわずかに隆起している。両手は腰の前で鉢状の容器をもっている。下半身はパニエ状に膨らむ。正面と左側面の写真しか示されて

いないので、背面の装飾の有無はわからない。ただ、サルモニーはこの資料を裸像として議論を進めており、衣類とみなされるような表現はなかったと考えられる。下半身の途中で素材の質感が異なっており、象牙質とセメント質の違いであろう。その境界線は腰の近くに位置している。

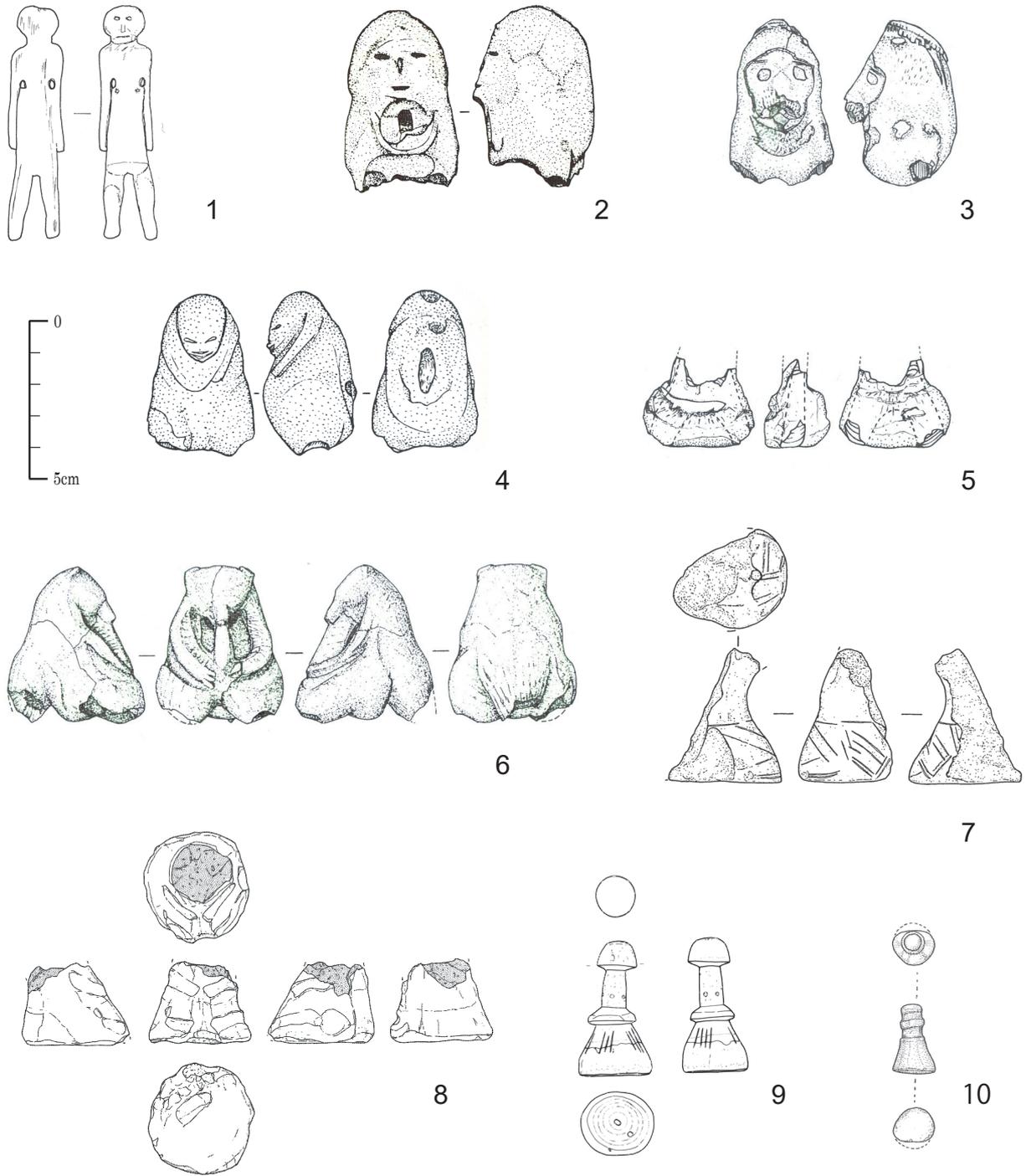
3-5 関連資料（図 4）

ここでは、牙製婦人像の関連資料とされるものを簡単に見ておきたい。

樺太本斗町南浜通二丁目出土資料（図4-1）は、長さ7.7cm、幅1.5cm、厚0.5cmと板状の鯨骨製で、四肢を表現した立像である（木村1984）。顔は「ドクロの面部」のようだとされ、目鼻口が表現されている。乳と陰部が隆起していることから、「女性の裸体」を表したものと報告されているが、プロポーションから女性らしさはあまり感じられない。両脇の部分に両面から穿孔されている。

骨偶は、遺跡のA地点の第一貝層から、鯨骨製の骨鋏・鳥骨製針入と伴って出土したという。第一貝層は、報告のB層に相当し、「三十糶一四十糶にして砂土を混じたる貝層より成りその中には獣骨魚骨等を多量に包含し土器は無文土器片刻紋土器片及捺形土器片を出土する」と述べられている。図示されている土器片は、刻文や型押文、円形刺突文をもつ。伴ったという骨角器も、オホーツク文化のものと考えて問題はない。大塚（1968）や前田（2001）はこの骨偶をオホーツク文化よりも新しい時期のものと考えているが、出土した土器は上層から下層に向けて古くなる傾向を示し、大きな攪乱を受けているとは考えにくい。したがって、この骨偶がオホーツク文化の十和田式期～刻文期に伴うものだった可能性を完全に否定することは難しいだろう。

礼文島香深井 A 遺跡（香深井1遺跡）は、礼文島東岸に位置するオホーツク文化の拠点的な集落遺跡である。北海道大学北方文化研究施設により、1968～72年に発掘調査が行われた（大場・大井編



1 本斗町南浜二丁目貝塚、2~5 香深井 A、6 オンコロマナイ貝塚
7 目梨泊、8・9 モヨロ貝塚、9 弁天島

図4 牙製婦人像の関連資料

1976・1981)。厚く堆積した魚骨層から大量の遺物が出土しているが、その中にネズミザメ（モウカザメ）の吻端骨で作られた骨偶がある。その大半が素材の形を生かしてクマを表現した座像である。前足の間に大きな魚（サケ？）のように見える何かを挟んでいる例が多い。香深井 A 遺跡ではほとんどが破損していたが、稚内市オンコロマナイ貝塚から、このポーズがよく分かる資料が出土している（図4-6）。類例は網走市モヨロ貝塚からも出土しているが、香深井 A 遺跡からの出土量は圧倒的に多い。

香深井 A 遺跡から出土した47例のサメ吻端骨製彫像のうち、4例が人を表現したともして報告されている。しかし、これらはいずれも人の像であるかどうか不確実な資料である。図4-2は、目と口が彫られ、鼻は浮彫で表現されているようだが、顔の彫りは非常に浅い。手を前で組んでいる点が牙製婦人像と共通するという指摘もあるが（大井編1982）、手の部分の彫刻もそこまで明瞭ではない。3は両目と眉（？）が表現されており、人間の像として「ほぼ誤りない」と報告されている。しかし、破損している下部に鼻や口があったとすれば、かなり鼻面が長くなるため、確実とはいえないだろう。4はたしかに他の「クマ彫像」に比べると鼻面が短い、人の顔というよりは獣のようにも見える。

牙製婦人像との関連で最も注目されるのは、5である。やはりネズミザメの吻端骨を素材とするが、原形を留めないほど削り込まれ、下端は平坦になっている。この資料については、「スカート状の衣装をつけた人物像」だった可能性が指摘されている（大場・大井編1981：p.58）。つまり婦人像の腰のくびれからパニエ状の基部にかけての下半身の破片かもしれないということである。さらにこの資料には「浮彫状に削り残された」部分がある点も、浜中2遺跡出土資料（図2-5）との関連で注目される。出土層位は間層Ⅲ-Ⅳであり、出土土器からは刻文期前半に位置付けられるだろう⁹⁹。幅は3.5cmであり、大きさの点でも牙製婦

人像とあまり変わらない。しかし、顔や胸、手といった部分を欠くため、人物像と認定するための積極的な根拠に欠けている。

道北部の代表的なオホーツク文化遺跡の一つである枝幸町目梨泊遺跡から出土した土製品（図4-7）は、「婦人像と思われる土製品」として報告されたものである（枝幸町教委1994）。残存高は4.2cmである。牙製像と同様に全体に前かがみに湾曲していると考え、右半身の脇から下半身にかけての部分が残っていることになる。下半身には沈線による装飾が施される。腰の部分を横線で区画し、その下に斜線をやや粗雑に施している。斜線は2本一組になっているらしく、鋸歯状のように見える部分もある。

この土製品はたしかに牙製婦人像の基部とサイズ・形状がよく似ている。目梨泊遺跡やホロベツ砂丘遺跡など枝幸町の遺跡では、骨角で作られることが多い動物意匠遺物が土製品として作られることが多く（高島2003）、この資料もそのような地域性のもとで製作された婦人像の可能性がある。

モヨロ貝塚出土土製品（図4-8）は、オホーツク文化刻文期の9c号堅穴床面から出土し、「いわゆる婦人像のスカートのような部分ともみられる」と報告された（網走市教委2009）。「正面に浅いケズリによって4本の沈線が施され」ているが、このような表現は牙製婦人像にはみられないもので、むしろクマ座像にみられる四肢の表現に近い。同じ9c号堅穴床面から出土したクマ座像土製品と比べると、全体に省略が進んだものではないだろうか。

モヨロ貝塚出土牙製品（図4-9）は、チェスのポーン状を呈する。高さ4.2cm、径は2.1～2.3cmである。前述した牙製婦人像と同じく、1948年の調査で出土したものである。出土位置は10号堅穴の床面であり、貼付文期前半のものである。上面がやや平坦な半球状の頭部が棒状の軸部で支えられ、基部はパニエ状にふくらむ。軸の根元には、つば状の張り出し部がある。軸の下方には、凹点が6個、器体を一周するように並ぶ。基部には3～4本一単位の縦の

刻線が4単位刻まれている。

報告では、この牙製品について牙製婦人像の「便化」の可能性が指摘されていた(駒井・佐藤1964)。大塚(同前)は、「頭に相当するふくらみ」と「スカート状の部分」に加え、点刻が乳房、つば状の張り出し部が組んだ両手を表した可能性を指摘している。北構(1974)は、婦人像とセットになる「男子の象徴彫刻」の可能性を示唆したが、やはり婦人像だと結論している。たしかにこの牙製品は、マッコウジラ歯牙という素材とふくらむ基部形態が、牙製婦人像と共通しているが、顔や手足、乳房などの表現を欠いているため、「人物像」「婦人像」だと断定することは難しい。

弁天島遺跡出土牙製品(図4-10)は、牙製婦人像(図3-10)と同じ7号堅穴の骨塚から出土したという。北構(2003)によって「樺太アイヌ人のもつ通称ニポポ(人形)に似ていなくもない」として紹介されたものである。モヨロ貝塚出土例とやや似たプローションだが、高さ2.2cmと半分程度の大きさであり、よりシンプルな作りである。

以上、牙製婦人像の関連資料を概観した。これらの関連資料について、①素材、②形態、③人物像としての要素、の3点から検討してみたい。樺太本斗町南浜通二丁目出土資料は、③人物像であることが確かな資料だが、①素材と②形態が大きく異なることから、同列に論じることは難しい。目梨泊出土土製品と香深井A遺跡骨製品は、牙製婦人像と共通する②形態をもつが、①素材が異なっており、③顔や手足、胸などの人物像(婦人像)と認定するための積極的根拠を欠く。これらの資料と牙製婦人像との関係については、残存状況の良好な資料が見いだされるまでは、判断を保留しておきたい。モヨロ貝塚出土の土製品については、人物像ではなくクマ座像との関連を考えるべきだろう。モヨロ貝塚と弁天島遺跡出土のポーン状牙製品は、牙製婦人像と①素材は同じ、②形態も共通点をもつが、③人物像と断定することは難しい。したがって、以下の考察におい

てはこれらの関連資料は対象としない。

3-6 小活

牙製婦人像としては、11点を確認することができた。北構による2001年の集成から20年を経ても増えていない。この間には相当な数のオホーツク文化の住居址や墓が調査・報告されているが、全く出土していない。これは単に希少であるというだけではなく、その使用や廃棄のあり方について、何らかの示唆を与えるものかもしれない。

出土状況が判明している資料についてみると、堅穴住居の床面が2点、貝層・魚骨層の上が3点である。墓に副葬された例や、遺構に伴うなど特殊なあり方を示す例はない。オホーツク文化の堅穴住居内では、奥壁に設けられた骨塚で儀礼が行われたと考えられているが、骨塚に伴った例も存在しない。やはりオホーツク文化を象徴する遺物とされる動物意匠遺物をみると、宇田川(2001)によって142例が集成されており、圧倒的に数が多い。また、道東部における出土状況を検討した角(2004)によると、床面と並んで骨塚からの出土例が多い。このように出土数と出土状況が全く異なっており、共伴した例もないことを考えると、牙製婦人像と動物意匠遺物を組み合わせるとオホーツク文化の「神概念」を復元しようとした大塚(1968)の構想には、やや無理があるのではないだろうか。

頭部の形態・装飾については、頭髪を表現したものとする考えと(米村・北構1940、菊池2004)、頭巾や帽子だとする考え(Salmony 1940、前田他2001など)がある。服装については、サルモニーが裸像とみたのに対して、日本の研究者の多くは背中や下半身にみられる表現から、着衣の人物だと考えている。ここでは、最も具体的な大塚(同前)による記述をみてみよう。頭の形態については、「髪を弁髪に結って、その束ねた髪を襟のはえぎわから頭上に折り返している」「削掛を束ねたもの」「帽子のような冠り物」の三つの可能性を挙げている

(p.28)。一つ目は、浜中付近採集資料にみられる頭部背面中央の隆帯について述べたものであり、北東アジアの遊牧民族との関係を想定したものだだろう。二番目は、アイヌの儀礼用冠を念頭に置いたものだと考えられる。三番目については、狩・漁撈のときにかぶると超自然的な力が与えられると信じられていたというアリユート族の樹皮製の円錐形帽子の例を挙げている。衣服の種類については、「うすものの衣装」(p.28)、背中の文様について「スカートの吊りバンド」(p.26)と述べ、さらにオロッコ(ウイльта)のシャーマンの衣装と比較している。

このように、大塚による議論では、牙製婦人像の頭髪や衣類の表現を、北方諸民族のシャーマンとの関連を意識して解釈している。菊池(1978)は、衣装は「裾広がりのワンピース」で、背面の浮彫は「満州ツングースおよび北東シベリアの諸民族の衣装に特徴的な、背面の刺繍を表現したもの」だと考えている。シャーマンではない女性の姿だとする点が異なるが、北方諸民族の姿を直接写したとする点では共通している。これに対して、北構(2001)のように仏像等からの変容を考える立場では、これらの表現は必ずしも製作者の姿を直接反映している必要はないことになる。一般論として、偶像からその製作者の風俗(髪型や衣類)を直接読み取ることは難しい²⁰。本論ではあくまで牙製婦人像そのものの変遷について考察することにした。

牙製婦人像は全て両腕を下ろした状態であり、手を挙げたり腕を横に広げたりするものはない。また、上腕が胴体と完全に一体化せず、脇の部分彫りぬいている。指がきちんと5本表現されている例が多いことも、写実的な印象を与えている。両手とも残るものは少ないが、腰の前で上下に重ねる例(図2-1)、左手を右ひじに置く例(2)、両手を腰の前にあてる例(4)、両手で容器を持つ例(6)、指先を下に向けて掌を合わせる例(図3-11)がある。別のものが組み合わさるものとして、前述した容器以外に、四足獣(図2-5)と不明彫刻(図3-7)がある。

4 素材

牙製婦人像の素材については、米村・北構(1940)がモヨロ貝塚付近採集資料をマッコウクジラ牙製とし、児玉・大場(1952)も浜中付近採集資料をマッコウクジラ牙製と考えた。これに対して、大川(1950)は浜中付近採集資料をセイウチ牙製だと報告したが、その具体的な根拠は示されていない。さらに大川は注の中で、モヨロ貝塚付近採集資料と弁天島採集資料についても、セイウチ牙製だった可能性を指摘している。このうち弁天島採集資料は1940年以前に逸失していたから、資料を実見しての判断ではない。モヨロ貝塚付近採集資料についても資料の観察所見は記されていない。したがって、これらの資料についてセイウチ牙製の可能性を考えたのは、浜中付近採集資料からの類推だったと思われる。ここで大川が亦稚貝塚出土資料に触れなかったのは、この注が「抹香鯨(?)の歯牙製」と疑問符を加えることに対する説明として付されたため、もともと「海獣牙製」としか報告されなかった亦稚例には言及する必要がなかったためである。

大塚(1968)は、牙製婦人像のうち、浜中付近採集資料、神崎小学校採集資料1、モヨロ貝塚採集資料についてセイウチ牙製だと述べている。その根拠としては、モヨロ貝塚採集資料について「マッコウクジラと記載されているが、形状から見てセイウチの牙らしい」と述べているのみである。しかしどのような「形状」にもとづいてこの資料をセイウチ牙製と推定したのか、説明はされていない²¹。北構(1974)は、牙製婦人像の「全てが同一種類の動物歯牙による彫像とすることにも、尚検討の余地がある」と述べた上で、オネモト遺跡出土例について、遺跡出土の標本とも比較した上で、マッコウクジラ歯牙として不自然ではないことを示した。一方で、セイウチ牙製の可能性のある資料として、浜中付近採集例とモヨロ貝塚採集例を挙げている。その根拠は、前者については明記されていないが、後者については「白色を帯び、やや軟質な素材」が、湧別川

西遺跡出土のセイウチ牙製とされる動物像に類似していることだという。しかし、湧別川西遺跡の動物像がセイウチ牙製であるかがまず問題となるし、象牙質の色調と質感の類似が、原材同定の根拠としようものなのかどうかについても検討しなくてはならない²²⁾。

内山は、現生マッコウクジラの歯牙のサイズや構造を示した上で、浜中2遺跡出土資料がマッコウクジラの下顎歯製だと同定した(前田・内山2001)。筆者も、東京大学所蔵のモヨロ貝塚発掘資料について、やはりマッコウクジラの下顎歯製だと考えた(高橋2021)。マッコウクジラは下顎に片側20～28本の湾曲した楕円錐形の歯をもつ。上顎歯は歯肉に埋没していて萌出することがないが、片側10～16本が生えている。上顎歯は下顎歯よりも小さいが、摩滅しないことから年齢査定にはより適しているとされる。これに対して、下顎歯はサイズが大きいため、彫刻の素材としてよりふさわしい。下顎歯の長さは平均で20cm(U.S. Fish & Wildlife Service n.d.)、最大で25cm以上(大隅1997)に達する場合もあるという。サイズの点では、13.8cmと最大の重兵衛沢例であっても、十分に製作可能であろう。

一般に歯はエナメル質・象牙質・セメント質から成る。象牙質が歯の主体を形成し、エナメル質が歯冠部を覆い、セメント質が歯根部をカバーする。ただし、マッコウクジラの場合は、セメント質が発達していてエナメル質の発達が弱い点の特徴である。エナメル質は先端にわずかしみられないため、下顎歯では摩耗して残っていない。上顎歯では先端付近にエナメル質が残存するが、前述したように歯肉に埋没しているためにセメント質に全体が覆われてしまう²³⁾。

セイウチ牙の特徴は、なんといっても最大1mに達するサイズにある。しかし、前述したように、これまでに知られている牙製婦人像には、セイウチ牙でなくては作れないほどの大きさの資料は存在しない。最大の重兵衛沢遺跡例でも15cmにも達せず、

下端部には歯髓腔が残っている。もしこの資料の素材がセイウチ牙だとすれば、数十センチの長さの象牙質部分を切り出すことが可能な長大な素材の、基部近くだけを使って製作したことになる。

オホーツク文化にセイウチ牙製品が存在する可能性を否定するものではないが、セイウチが自然分布しないオホーツク海沿岸域においてセイウチ牙製だと断定するためには、より確実な根拠が必要だと考える。セイウチ牙の組織・構造面における特徴は、特に雄の牙において断面形が整った楕円形にならずに周縁が波打つ点、象牙質に長い縦のクラックが入る点、象牙質が二層構造になっていて中心部に大理石状の骨象牙質²⁴⁾がみられる点などが挙げられる(U.S.Fish&Wildlife Service ibid.)。今後は、こうした特徴にもとづいて、確実にセイウチ牙を同定する必要があるだろう。

5 分類と編年

5-1 これまでの分類と編年

大塚(1968)は、偶像(牙製婦人像)を「時期的なうえから、また形態的に」、次のように分類した。Aグループは、「地域的分布が利尻・礼文両島に限定される」もので、「頭部を失わず、ほぼ完全な形」であることも特徴だという。Bグループは、「いくらか小形になり、浮き彫りや線刻もすくなくなる傾向をしめし、また頭部が意図的に打ち欠かれているようである」「北海道のオホーツク海沿岸一帯に拡がっている」という。Aグループをオホーツク文化前半、Bグループを後半に編年している。さらに「頭部が丸く、平面的なことを特徴とする」Cグループも設定しているが、これはサハリン出土の1点のみで、A・Bよりも遅れる(オホーツク文化よりも新しい)時期のものだと考えている。したがって、オホーツク文化の偶像については、A・Bの二つのグループに分けたことになる(表1)。

この論文における大塚の記述では、分類基準とそれ以外の属性(欠損・分布・時期を含む)の説明が

混然となっており、相互の関係がやや分かりにくい。しかし、遺物の製作時の属性で分類した上で、それぞれのグループの特徴として、欠損の状態、地域差や時期差を述べていると考えておく。AグループとBグループの分類基準は、サイズの違いと装飾(浮彫や線刻)の多少ということになる。一方、1975年の『ドルメン』座談会における大塚の発言をみると、「比較的大形でかなりリアリティにとむ彫りのものが、古い時期つまり刻文期のものである可能性が強い。それから小形で非常に抽象化が進んだものは新しい時期である」と述べており(大塚他1977:p.72)、リアルからの抽象化というやや異なる表現で編年観が述べられている²⁵⁾。

前田(2001)は、大塚による分類を紹介した上で、浜中2遺跡出土資料が、大塚の分類や編年観に必ずしも当てはまらないことを指摘した²⁶⁾。浜中2遺跡資料が、道北出土で頭部を残すというAグループの特徴を持ちながら、小形でオホーツク文化の後半期(沈線文期)に属するという点を問題にしたわけである。その上で、大塚の分類基準のうちサイズの違いは、頭部の欠損状況によって印象が左右されたもので、AグループとBグループの間にサイズの違いはないと指摘した。頭部の欠損については、時期差ではなく地域的な習俗の違いとみなしている。AグループとBグループの間にサイズの違いがない点、また前者が古く後者が新しいという編年観に問題がある点は、前田の指摘する通りであろう。しかし、新たな分類案や牙製婦人像全体の編年案は提示されておらず、あくまで個別の資料について従来の分類・編年の枠組みの問題点を指摘するに留まっている。

5-2 編年案の提示

牙製婦人像の編年を行うにあたっては、10例程度と極めて限られた資料しかなく、かつ帰属時期に関する考古学的情報を欠く資料が多いという制約がある。このため通常行われるような型式の設定や編

年作業を行うことは困難である。個々の要素について分類し、変遷の順序を仮定し、その変遷観に基づいて個別の資料を位置づけるという方法を採用ことにしたい。

頭部、胴部、下半身の装飾を、次のように整理する。これらの装飾が施されるのは、基本的には背面側である(図5)。

頭部の形状とモチーフ

- a. 明瞭な菱形(夙形)で、入れ子状の図形
- b. 水滴形で、両側にカッコ状の刻線を重ねる
- c. 側縁に列点がめぐる
- p. 無文

胴部

- a. π 字形の浮線と、中央部に斜格子
- b. H字形の浮線
- c. 細沈線を重ねたX字形
- p. 無文

下半身の縦線

- a. 断面が半円形になる浮き彫り状
- b. 平行刻線を多数並べる
- c. 浅く幅広い凹線を並べる
- d. まばらな刻線
- p. 無文

衣類やかぶり物(帽子・頭巾)を具象的に表していた段階から、モチーフが崩れて表現が省略化される変化を想定している。これに基づいて、道東部と道北部の地域差を考慮しつつ、牙製婦人像の変化を3段階に分ける(図6)。

I段階

I段階とした資料は、頭部が角ばって入れ子状のモチーフを持ち、胴部に衣装に由来すると思われる表現をもつ。下半身には浮彫や刻線によるひだ状の

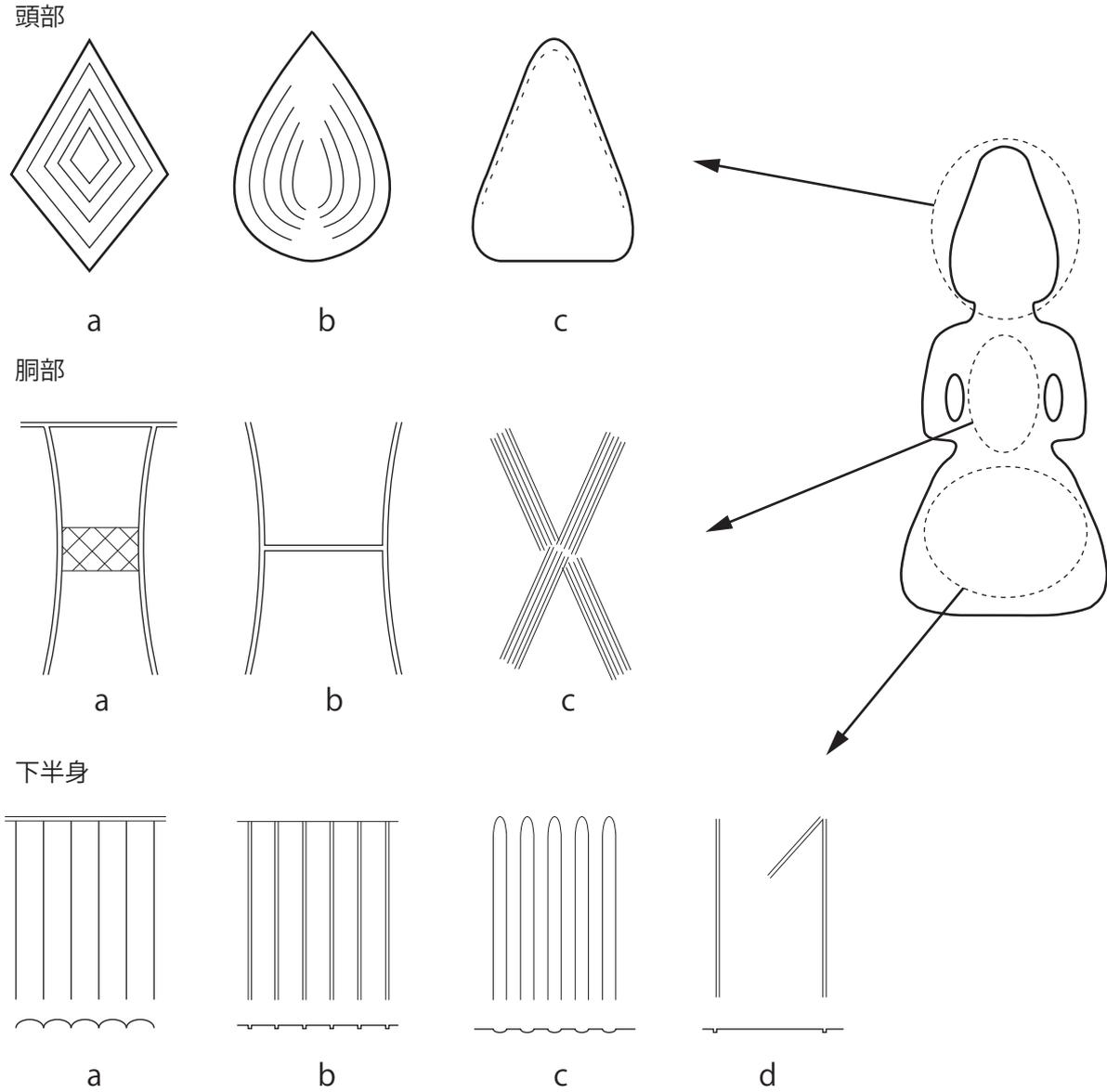


図5 牙製婦人像の分類基準

表2 牙製婦人像の段階区分

図番号	遺跡名	段階	頭部	胴部	下半身	大塚分類
図2-3	神崎小学校	I	a	a	a	A
図3-7	モヨロ貝塚付近	I	欠	b	p	B
図3-9	弁天島	I	欠	b	p	—
図2-2	重兵衛沢	I	a	c	b	A
図2-5	浜中2	II	b	p?	p	—
図3-8	モヨロ貝塚	II	欠	p	p	B
図2-1	亦稚貝塚	III	c	p	p	A
図3-11	オンネモト	III	欠	p	c	—
図3-10	弁天島	III	欠	p	d	—
図2-6	不明	不明	p?	p?	p?	—
図2-4	神崎小学校	不明	欠	p	p	B

道北
 道東

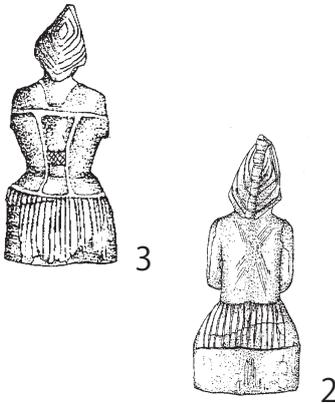
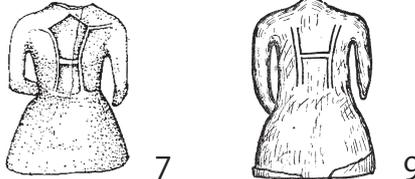
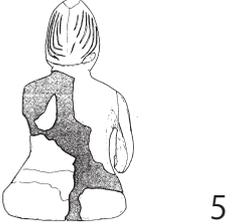
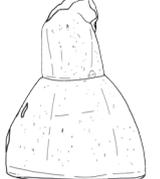
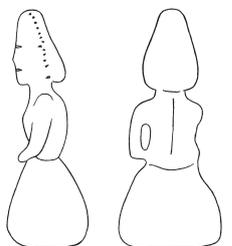
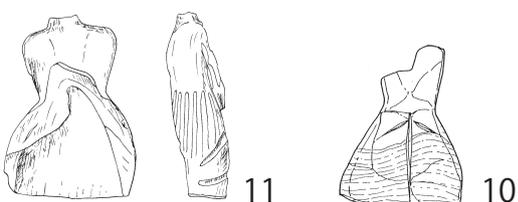
	道北部	道東部
I	 <p>3 2</p>	 <p>7 9</p> <p>(番号は図2・3と共通、縮尺不同) (下線は時期が分かる資料)</p>
II	 <p>5</p>	 <p><u>8</u></p>
III	 <p>1</p>	 <p>11 <u>10</u></p>

図6 牙製婦人像の変遷

表現を持つ。おそらくさらに細分可能だと思われる。

神崎小学校採集資料1(図6-3)は、頭部・胴部・下半身のモチーフが古い様相を示すと考えた。整った形で、立体的に彫り込まれている。モヨロ貝塚付近採集資料(7)と弁天島採集資料(9)は道東部の資料で、下半身が無文であるが、背中には浮線による装飾をもつ。浜中付近採集資料(2)は、衣装の形状を立体的な浮彫で写しとったようなモチーフ

が、細沈線や沈線に置き換わっている。こうした点から、より新しい様相を示していると考えられる。

I段階は全て採集資料で、年代を与える根拠がない。ただし、オホーツク文化が道東部に本格的に進出するのは、刻文期以降とされており、モヨロ貝塚においても、十和田式期の土器はこれまでにわずか2点が確認されたのみである(熊木2009)。また、次にみるようにII段階が沈線文期に相当すると考え

ている。このため、I段階はおおむね刻文期に相当するとみておきたい。

II 段階

浜中2遺跡出土資料(5)は、I段階とした資料と比較すると、頭部の形と入れ子状のモチーフが崩れている。胴部と下半身は無文である。モヨロ貝塚出土資料(8)は、胴部と下半身が無文で頭部を欠いているため、本論の分類基準は適用できないが、沈線文期前半までに形成された貝層の直上から出土していることから、この段階に位置づけておく。

III 段階

亦稚貝塚出土資料(1)は、頭部の刻線が省略されて列点になったものだと考えて、この段階に位置づけた。スケッチである点に注意が必要であるが、頭部の形も隅丸三角形で崩れているように見える。胴部・下半身は無文である。

オンネモト遺跡出土資料(11)と弁天島遺跡出土資料(10)は、いずれもオホーツク文化の貼付文期後半に伴うと報告された。道東部ではこの段階になって下半身に装飾をもつ資料が現れるが、偶然の資料の偏りによるものか、わからない。下半身の表現は、浅い凹線によるものと刻線がまばらなものがある。

道東の2点の年代観から、III段階は貼付文期に相当すると考えられる。亦稚貝塚出土資料についても、同じ時期と考えておく。

以上、9点の資料について三段階の区分を試みた。背面の文様を中心に分類を行ったため、神崎小学校採集資料2(4)とサルモニー報告資料(6)については、どの段階に属するか不明とした。今回示した編年案では、大塚(1968)によってAグループ(1・2・3)とBグループ(7・8)とされた資料が、それぞれ複数の段階に分かれている。しかし、やはり大塚(同前・大塚他1975)によって指摘されていた、浮彫や線刻が少なくなる傾向、あるいはリアルから

の抽象化という方向性は、今回示した編年案でもある程度共通している。

6 おわりに

牙製婦人像に関わる研究史を整理し、資料を改めて概観した上で、新たな分類・編年案を示した。わずかな資料に基づいた立論ではあるが、停滞状況にある研究に一石を投じることができればと考える。

謝辞

東京大学考古学研究室所蔵資料の実見にあたっては、福田正宏准教授・石川岳彦助教のお世話になった。モンゴル・モンゴリアの呼称の実態については、畠山禎氏のご教示を受けた。末筆であるが、記して感謝したい。

[註]

- (1) 1933(昭和8)年夏に札幌で開催された『北海道原始文化展覧会』において、千島や樺太、北海道の資料が一堂に集められたことが契機だったという(米村1969)。
- (2) 採集地点については後述するように議論があるが、本稿では浜中付近採集資料とする。
- (3) 大塚は採集地点を浜中遺跡と呼んでいるが、本論では神崎小学校とする(詳しくは後述)。
- (4) 大塚(同前)とは異なり、本斗町南浜二丁目貝塚の資料を対象に含めていない。
- (5) この発言は司会者によるもので、東北地方の縄文時代晩期の大型遮光器土偶の事例が参照されている。シンポジウムの司会は、大場利夫・桜井清彦・吉崎昌一・林謙作が務めた。
- (6) 引用されているワシリエフスキー1978年論文は未見であるが、前田によれば、牙製婦人像を4つのタイプに分けており、「基本的に大塚分類と類似したもの」だという。
- (7) 大塚は1975年の座談会で「北部モンゴリア」としながらもサルモニー論文との齟齬にふれて「どちらかわからない」と発言したが(大塚他1975: p.72)、1977年のシンポジウムでは「南部モンゴリア」と述べている(大井編

- 1982: p.132)。
- (8) Dirk Foch (1886-1973) はオランダ領東インド諸島で生まれ、欧州と米国で活躍した音楽家である。彼のコレクションの行方については手掛かりがつかめていない。
- (9) 本文中に引用したサルモニー論文の和訳は、筆者自身による。サルモニー論文の全訳を提示した北構の学問的姿勢は高く評価されるが、中国の王朝名の翻訳などにやや問題がある。例えば、「シャン王朝」と訳された Shang date は殷時代とした方が日本の読者にはわかりやすい。Early Chou は「周初」ではなく西周、Late Chou は「周末期」ではなく東周（春秋戦国時代）とするのが妥当であろう。また「チャン」= Chan は遊牧国家の君主の称号である汗（ハン）のドイツ語表記である。
- (10) As a funerary statuette, this tooth-baba found its way into a grave near or even across the Chinese border where it was eventually exhumed and caught by the highly organized art-trade of the Far East, without reference to the place of clandestine discovery. (Salmony 1940: p.14, l.17-20)
- (11) It may be assumed that its Turkish maker lived near enough to the Chinese border to borrow the symbol which survived the Han period in some ill-investigated usage or material. (Salmony *ibid.* p.14, l.9-1.12)
- (12) 注 10 を参照。
- (13) 英語における Mongolia と同様に、日本語における「モンゴル」にも両義性がある。しかし、日本では「モンゴル」がモンゴル国を指すというイメージが強いため、モンゴル国と中国内蒙古自治区を合わせた範囲の総称として「モンゴリア」を使うことがある。大塚や北構による「北部／南部モンゴリア」という呼称は、この点において妥当である。ただし、その範囲を南北に区分する場合は「南モンゴリア」「北モンゴリア」とするのが一般的であるので、本文では基本的にこのように表記する。
- (14) 後年に重兵衛沢の右岸で発見・調査された重兵衛沢 2 遺跡でもオホーツク文化の遺物は出土していない（礼文町教委 1986）。
- (15) 1970 年には「神崎ウエンナイボ遺跡」として発掘・報告されたが、この時の調査ではオホーツク文化期の遺物は出土していない（松野他 1970）。
- (16) 牙製婦人像の下半身にみられる半球状にふくらんだ形態を「スカート状」と表現することがあるが、必ずしも全てのスカートがふくらむわけではないので、本論では「パニエ状」と表現する。
- (17) この資料については、10 号堅穴出土として扱われることが多かった（大塚 1968、北構 1974、宇田川 2002 など）。しかし報告書の記載内容を再検討したところ、10 号堅穴に隣接した貝層上からの出土であることが明らかとなった（高橋 2001）。
- (18) ここでいうオホーツク文化の「終末期」の内容は明記されていないが、貼付文期の後半（藤本 e 群）を指すと考えておく。
- (19) 熊木（2018）は、魚骨層Ⅳの堆積期間中に刺突文群と刻文Ⅰ群への交代が生じ、魚骨層Ⅲを刻文ⅠからⅡへと漸移的に推移する過程とみている。間層Ⅲ/Ⅳの堆積時期は、刻文期前半ということになるだろう。
- (20) 偶像から直接過去の風俗（服装や髪形など）を復元する研究は、明治時代の土偶研究で盛んに行われた。現在でも黥面など一部の要素について試みられることがある。
- (21) 大塚論文の中でセイウチ牙と判断した根拠が明示されているのは、上泊遺跡採集の牙製クマ像についてであり、「セイウチの牙に特有の髷がクマの背中全体にみられる」と述べられている。
- (22) 筆者は、アラスカのセント・ローレンス島出土のセイウチ牙製銛頭を観察した経験から、セイウチ牙の象牙質について、透明感のある鉛色～白色で極めて硬質だという印象をもっている。ただし、こうした肉眼観察による印象で原材を同定できるかどうかについては、慎重であるべきだろう。
- (23) 前田・内山（2001）はマッコウクジラの歯の断面図（p.90、第 3 図）と牙製婦人像の素材利用想定図（p.91、第 4 図）を示している。マッコウクジラ下顎歯を利用したとする想定は正しいと考えられるが、図示されているのは先端のエナメル質までセメント質に覆われたマッコウクジラ上顎歯の断面であり、本文の記述と整合していない。

- ②4 骨象牙質 osteodentin はセイウチ牙だけに限られるわけではなく、例えばマッコウクジラの歯の中心部にも形成される。ただし、セイウチ牙ほど特徴的に発達するわけではないらしい。
- ②5 大塚のいう「小形で非常に抽象化の進んだもの」は、モヨロ貝塚出土のボーン状牙製品（図4-9）を念頭に置いていた可能性がある。本論では、この資料を組みこんだ単純的な変遷過程は想定していない。
- ②6 前田は、大塚の分類基準には「頭部の欠損」も含まれていると考えており、本論とはやや異なる解釈である。

図版出典

- 図2-1：坪井 1901、2～4：大塚 1968、5：前田・内山 2001、6a：Salmony 1940、6b：III ep 1966
- 図3-7：右側面は米村・北構 1940、下面は米村 1950、他三面は大塚 1968、8：高橋 2021、9：米村・北構 1940、10：北構 2001、11：東京教育大学文学部 1974
- 図4-1：木村 1984、2・3：大場・大井編 1976、4・5：大場・大井編 1981、6：大場・大井編 1973、7：枝幸町教委 1994、8：網走市教委 2009、9：高橋 2021、10：北構 2003

引用・参考文献

- 網走市教育委員会 2009『史跡最寄貝塚』
- 宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
- 宇田川洋 2001「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」『東京大学考古学研究室紀要』8:1-42
- 宇田川洋 2002「もう一つの日本列島史」『北の異界—古代オホーツク氷民文化』東京大学コレクション、東京大学総合研究博物館、pp.62-71
- 枝幸町教育委員会 1994『目梨泊遺跡：一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大井晴男 1972「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について：擦文文化とオホーツク文化の関係について、補

- 論2』『北方文化研究報告』6:1-36
- 大井晴男 1976「第1節 礼文島の遺跡群」『香深井遺跡』上、pp.3-19
- 大井晴男編 1982『シンポジウム オホーツク文化の諸問題』学生社
- 大川 清 1950「北方文化圏出土の婦人像」『古代』2:38-41（1954年に1・2合併号として再刊）
- 大川 清 1998『北海二島：禮文・利尻島の考古資料』、窯業史博物館
- 大隅清治 1997『クジラは昔陸を歩いていた』PHP研究所
- 大塚和義 1968「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11:21-32
- 大塚和義・加藤晋平・桜井清彦・山口敏 1975「海獣狩猟民・オホーツク文化の源流」『どるめん』6:47-90
- 大場利夫・大井晴男編 1973『オンコロマナイ貝塚』オホーツク文化の研究1、東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1976『香深井遺跡』上、オホーツク文化の研究2、東京大学出版会
- 大場利夫・大井晴男編 1981『香深井遺跡』下、オホーツク文化の研究3、東京大学出版会
- 菊池俊彦 1978「オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『北方文化研究』12:39-74
- 菊池俊彦 2004『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 北構保男 1974「牙製婦人像について」『オンネモト貝塚』、北地文化研究会、pp.169-199
- 北構保男 2001「牙製婦人像の新出資料」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.121-123
- 北構保男 2003「オホーツク文化遺跡出土婦人像の追加資料」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.110-112
- 北構保男・岩崎卓也 1967「北海道根室市オンネモト遺跡の調査」『考古学ジャーナル』15:14-16
- 木村信六 1984「樺太本斗町南浜通二丁目貝塚調査報告」『千島・樺太の文化誌』北海道出版企画センター（初出：1934）

- 熊木俊朗 2009「オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」網走市教委『史跡最寄貝塚』、pp.303-319
- 熊木俊朗 2018『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』、北海道出版企画センター
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7:167-269
- 駒井和愛 1964「モヨロ貝塚の発掘」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下、pp.7-19
- 駒井和愛・佐藤達夫 1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下、pp.78-88
- サルモニー、アルフレッド 2001「石製婦人像に関する研究」『アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集』、北地文化研究会、pp.78-91
- 角達之助 2004「オホーツク文化の動物意匠遺物についての一考察」『北方島文化研究』2:49-60
- 高橋 健 2021「モヨロ貝塚出土の牙製婦人像」『東京大学考古学研究室研究紀要』34（印刷中）
- 高島孝宗 2003「オホーツク文化の信仰と儀礼」『続縄文・オホーツク文化』、北海道の古代2、北海道新聞社、pp.162-181
- 高島孝宗 2005「オホーツク文化における威信材の分布について」『海と考古学』、六一書房、pp.23-44
- 東京教育大学文学部 1974『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部考古学研究報告4
- 坪井正五郎 1901「北海道利尻貝塚発見の海獣牙製の人形」『東京人類学会雑誌』178:125-128
- 林 俊雄 2005『ユーラシアの石人』雄山閣
- 前田 潮 2002「第3章第1節 牙製婦人像について」『オホーツクの考古学』同成社、pp.97-108
- 前田 潮・内山幸子 2001「礼文島浜中2遺跡出土の牙製婦人像」『考古学雑誌』86(3): 293-305（同論文の内山執筆部分「素材の動物考古学的検討」以外は、前田2002にほぼ再録）
- 松野正彦・佐藤忠雄・兼重達男 1970「礼文島神崎ウエンナイボ遺跡調査概報」『考古学雑誌』56(2):66-82
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館
- 米村喜男衛 1969『モヨロ貝塚：古代北方文化の発見』講談社
- 米村喜男衛・北構保男 1940「オホーツク文化圏出土の牙製婦人像」『考古学』11(11):654-660
- 利尻町教育委員会 1978『亦稚貝塚』
- 礼文町教育委員会 1986『重兵衛沢2遺跡』
- 礼文町教育委員会 1992『浜中2遺跡発掘調査報告書』
- 礼文町立神崎小学校 n.d.「神小のあゆみ」
<http://reikyoi.jp/kanshou/index.php/about/>（2021年1月11日閲覧）
- Radloff, W.1892
Atlas der Alterthümer der Mongolei : vol.1, St.Petersburg（国立情報学研究所「デジタル・シルクロード」／東洋文庫 . doi: 10.20676/00000220.）
- Salmony, A. 1940
Notes on a "Kamennaya Baba". *Artibus Asiae*. 13:4-16
- U.S. Fish & Wildlife Service n.d.
Ivory identification guide. https://www.fws.gov/lab/ivory_guide.php（2020年12月31日閲覧）
- Ше р , Я . А . 1966
Каменше Изваяния Семпречья.

Ivory female figurine of the Okhotsk Culture

Ken Takahashi

The ivory female figurine is said to be one of the most representative artifacts of the Okhotsk culture in Hokkaido. There has been little progress, however, in the study of these artifacts in the last twenty years. In this paper, the author examines the research history of these artifacts and points out that the specimen reported by A. Salmony in 1940 cannot be the “original figurine” on the Asian Continent, as it has often been claimed. The author also discusses the transformation process of the ivory figurines and forms a hypothetical chronology of the figurines in three stages, from the early to late Okhotsk culture.

横浜ユーラシア文化館 第9号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 9

2021年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館

〒231-0021 横浜市中区日本大通12

Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453

www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団

印刷製本 株式会社佐藤印刷所

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures

12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation

Printed in Japan by Sato Printing Co., Ltd.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2021

ISSN 2187-7734